

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文章完成法テストよりみたイタリア人のパーソナリティ：日本人およびアメリカ人との比較分析

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 祖父江, 孝男 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004615 |

文章完成法テストよりみたイタリア人のパーソナリティ

—日本人およびアメリカ人との比較分析—

祖父江 孝 男*

Italian Adolescent Personality as Seen through the Sentence Completion Test: Some comparisons with Japanese and American Patterns

Takao SOFUE

In this report I compare aspects of Italian adolescent personality with that found in Japan and in the U. S. Basic data for these comparisons consist of responses to the Sentence Completion Test (KSCT-G, compiled by Y. Kataguchi *et al.* 1964). (See Tab. 1,2)

The Italian data were collected in the field in 1974 by Yutaka Tani from 284 ninth-grade students in the city of Teramo, the town of Montorio, and the village of Ouercino—all in the Abruzzo district of central Italy. The Japanese and U. S. data were collected by me in 1965-67 (See Tab. 3). The Japan sample (N=153) includes students from a mountain village in Yamanashi prefecture as well as from the city of Tokyo. The U. S. sample (N=155) is urban, but includes both upper middle class whites and ghetto-area blacks.

In this comparative perspective the Italian adolescents exhibit the following characteristics:

1) A strongly positive attitude both towards father and towards mother. Some sentimental dependency upon the mother also is characteristic. (See Tab. 4 and 5. Note that in these tables P=positive, Nu=neutral, Na=negative-active, and Np=negative-passive types of attitudes. Negative-active attitudes are, put differently, tendencies towards aggression; negative-passive ones towards avoidance.)

2) The Italians are less sociable towards strangers than are Americans but more so than are Japanese (Tab. 6).

3) Males tend to be very positive towards heterosexual

* 国立民族学博物館第1研究部

relationships, females tend to be negative-passive (Tab. 7). Although the difference between Italian and American groups is not statistically significant, the Italian males show a distinct pattern of “flattery” towards females.

4) Strongly positive reactions towards people in authority (Tab. 8).

5) Extremely strong negative-active reactions when “people laugh at them” (Tab. 9). This probably can be connected with a strong sense of honor.

6) Very strong negative-passive (i.e. depressive) feelings when they “feel that people do not like them” (Tab. 10); when “people ignore them” (Tab. 11), or when “criticized by others” (Tab. 12).

7) Among Japanese, intrapunitive feelings dominate in cases of failure, but this is unusually weak among Italians (Tab. 13)—e.g. “I was wrong,” “I was not competent enough,”—“I am the one responsible” etc.

8) Responses to “My greatest desire is...” and “What I need most...” indicate very strong concern with heterosexual relationships. There also are indications of the importance of family (Tab. 14, 15).

9) Italian attitudes towards authority and honor appear to be promising topics for further investigation, and should be examined in conjunction with Japanese patterns of reciprocity, shame, and *giri* (sense of obligation). An analysis of the “individualistic” aspect of Italian attitudes also is desirable.

- | | |
|------------------|------------------|
| I. はじめに | 5. 他人からの攻撃に対する態度 |
| II. 文章完成法テストについて | 6. 他人からの拒絶に対する態度 |
| III. 分析の結果 | 7. 失敗の原因についての態度 |
| 1. 父母に対する態度 | 8. “心からのねがい” |
| 2. 未知の他人に対する態度 | 9. “なにより必要なのは” |
| 3. 異性に対する態度 | IV. むすび |
| 4. 権威に対する態度 | |

I. はじめに

この論文は本館併任助教授・谷泰氏（京都大学人文科学研究所助教授）が1974年6月、イタリア半島中部 Abruzzo 県 Teramo 郡にある都市 Teramo, Montorio の町

および羊を中心とした移牧を行なっている山村 Quercino において、中学生に実施した文章完成法テストの結果を筆者が分析してまとめたものである。

谷氏は1969年、京都大学人文科学研究所ヨーロッパ第二次学術調査隊（会田雄次隊長）の一員としてこの地方で社会人類学的調査を行ない、その後、1973、1974、1975年の3回にわたって追調査を行っており、特に Quercino の村についてはすでにいくつかの報告が出版されている [谷 1970, 1971, 1976]。他方、筆者は1965年以来、文章完成法テストを用いて、日本人、アメリカ人、アラスカ・エスキモーのパーソナリティに関する比較研究を試みており [祖父江 1969, 1972]、これに使用した文章完成法テストを谷氏および同アンナ夫人がイタリア語に訳して1974年の現地調査の際に携行し、現地の Don Nicola Jobbi 司祭らの協力を得て、中学生についてのデータを得ることができた。

こうして収集した資料は谷氏のもので日本語に訳され、これに筆者が分析を試みたものである。なお筆者は極く短い期間、ローマに滞在した体験を持つにすぎず、テスト結果の解釈にあたってはテストの資料のひとつひとつについて、谷氏御自身から詳細なコメントを頂いた。こうした谷氏からのインフォメーションに加えて、筆者自身が短期ながらもイタリアで過した体験、アメリカ留学中に観察した在米イタリア人の行動型、また、イタリア人やイタリア系アメリカ人の登場する映画、小説その他の文献類も筆者自身の解釈のたすけとなっている。この論文はこうした経過によって出来あがったものであるから実質的には谷氏との共同研究に他ならないのであるが、執筆のすすめ易さなどの点から、同氏の希望もあって、いちおう私の単独著という形をとることにした。

なお、データの統計的処理については大阪大学人間科学部助教授の浜口恵俊氏にいろいろ御教示頂き、同学部学生・前田佳子氏に計算して頂いた。あわせてお礼申しあげたい。

Ⅱ. 文章完成法テストについて

文化人類学における“文化とパーソナリティ論”あるいは“心理人類学”の分野で、諸種族、諸民族のパーソナリティを測定する方法として一般に用いられてきたのは、観察法とあわせてもっぱらロールシャッハ・テストと TAT であった。1960年代に入ってからには特にロールシャッハ・テストの cross-cultural な使用についての批判が極めて多くなり、その結果として人類学者の間におけるロールシャッハ・テストの使用

は激減したが、1930年代から50年代に到るまでの間においてはこれらのテストが両者ともに最も多く使われたのである。これらのテストはパーソナリティの分析方法としては最も精密なものと考えられるし、殊に文字を使わないため、“文字なき社会”の研究には適しているとみなされたからであった。しかしながら、これら二つのテストは被験者ひとりひとりを個別に面接しながら施行するものであるため、多大の時間を要するので、多くのサンプルからデータを集めるのが甚だ困難であるところに大きな弱点があった。そこで筆者は日本人パーソナリティの地域差を求め、更に他の ethnic groups との比較を行なうため出来るだけ多くのデータを比較的短期間に集めるという目的にかなうものとして文章完成法テスト (Sentence Completion Test—SCT) を1965年以来、使用してきた。なお文化人類学の分野でこのテストを用いている研究はまだ極めてわずかであるにすぎない [RYCHLAK, MUSSEN & BENNETT 1957; PHILIPS 1965; LEBRA 1973]

さてロールシャッハ・テストなどとは異なり、この文章完成法テストはまだ標準化されているわけではなく、いくつもの種類があるが、筆者は臨床心理学者・片口安史氏ら東京ロールシャッハ研究会が1964年に創案・発行している構成的文章完成法テスト (KSCT-G 型) を使用した。これは36個の文章から成るものであるが、筆者の場合には対象が後述するごとく中学生であるため、不適当と思われる6項目 (いずれも性に関するもの) は除去し、また一部の文章を部分的に改めて使い易くした。このテストの項目は表1および表2に示した通りである。

なお調査対象はすべて中学3年生に統一することに定め、1965—66年に日本各地において男女計629名の被験者から資料を集めた。日本人パーソナリティの地域差を求める目的からいって、それぞれの土地のハエヌキの成人についての資料が最も適切なのであるが、成人に関する資料は戸別訪問して収集せねばならず、ロールシャッハ・テストなどと同等の長い時間が必要となってくる。そこでなるべく短期間に多数の資料を得る目的から、授業時間にいっせいに書きこんでもらうようにした。しかし高校生となれば経済的に一定階層以上の者に限られてしまい、また教育程度が高くなればパーソナリティの地域差が薄れ、むしろ共通要素のほうが多くなることが考えられるので、義務教育の最高年次としての中学3年生を選んだのである。これと比較する目的で1967年にアメリカで行なったテストの場合においても、対象はすべて中学3年生に統一し、白人黒人計155名からデータを収集した。

次にこのテストの分析方法はこれまたロールシャッハ・テストの場合のように標準化されているわけではなく、それぞれの調査目的に従ってさまざまな方法が用いられ

表1 構成的文章完成法テスト (KSCT-G)*

Tab. 1 Sentence Completion Test (KSCT-G) compiled by
Y. Kataguchi et. al. 1964

検査のやり方：以下のページにしり切れとんぼの文章が印刷してあります。この文章を使って、空欄のところに文章をつづけてください。文章の上手、下手を気にしないで、最初に頭に浮かんだことを記入してください。どうしても文章が浮かばないときには、その項目に○をつけておいて、あとからうめてもけっこうです。時間の制限はありませんが、できるだけ早く記入してください。なお、正しい答とか、誤った答とかいうものは全然ありませんから、自由に思いつくままに記入していただきたいのです。

1. 父についての最初の思い出は
2. 母といるときかんずるのは
3. 男の人にあうとき、私は
4. あの女のひと**に対して私がとった態度は
5. 人にあってたいていかんずることは
6. 人から命令されると、私は
7. 父といるときいつもかんずることは
8. 母についての最初の思い出は
9. あの男のひと**に対して私がとった態度は
10. 女の人にあうとき、私は
11. 人に紹介されると、私は
12. 権威のある人は
13. 人からかわれたとき
14. 他人が私を好いていないとかんずるとき
15. 欲しいものが手に入らないとき、私は
(問 16-18 は性に関係ある項目なので除去)
19. 人から批判されたとき、私は
20. 人が私を相手にしてくれないとき
21. とてもできそうもないので、私は
(問 22-24 は性に関係ある項目なので除去)
25. それがうまくゆかなかったわけは
26. 私がおそれているのは
27. 私の気がふさぐのは
28. わるいことをしたと思うのは
29. 私がよく空想するのは
30. 私の心からの願いは
31. 私がとても不満に思うのは
32. いちばん心配になることは
33. 私がひげ目をかんずるのは
34. 私が罪悪感をもつのは
35. そうできたらよいとたびたび思うことは
36. 何よりも必要なのは

* 不許複製 (著作権所有者東京ロールシャッフ研究会)

** もともとの第4問と9問はそれぞれ“彼女に対して……”、“彼に対して……”となっていたのであるが、“彼”および“彼女”という語は中学生などの間においては、そして特に村落地帯において“恋人”というような特殊のニュアンスをもっているののでこのように修正した。

表 2 文章完成法テスト (KSCT-G) の英訳版 (Mio Kawamura Reynolds 訳)
および伊訳版 (谷泰・谷アンナ共訳)

Tab. 2 English Edition (translated by Mio Kawamura Reynolds) and Italian Edition
(translated by Yutaka and Anna Tani) of the Sentence Completion Test

The following sentences are incomplete. Please complete these sentences with the first thing that comes in to your mind. In case nothing comes to your mind put a circle around the number of that sentence and return to it later. Try to finish as soon as possible. There are no wrong or right answers, so please respond as you like.

- 1) My first memory of my father
- 2) When I am with my mother I feel
- 3) When I meet a man, I
- 4) My attitude toward that girl
- 5) Most people
- 6) When I am ordered to do something, I
- 7) When I am with my father, I feel
- 8) My first memory of my mother
- 9) My attitude toward that boy
- 10) When I meet a woman, I
- 11) When I am introduced to people, I
- 12) People with authority
- 13) When people laugh at me, I
- 14) When I feel that people do not like me, I
- 15) When I cannot get I want, I
- 16) When I am criticized by others, I
- 17) When people ignore me, I
- 18) When I find something is difficult, I
- 19) I could not do it because
- 20) I fear
- 21) I get depressed when
- 22) It was wrong for me to
- 23) I often imagine that
- 24) My greatest desire is
- 25) I am dissatisfied by
- 26) I worry about
- 27) I feel inferior when
- 28) I feel guilty about
- 29) I wish I could
- 30) What I need most

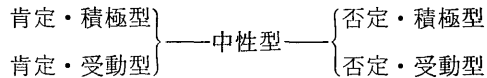
Le frasi seguenti sono incomplete. Completatele con la prima cosa che vi viene in mente. Se nulla vi viene in mente, fate un cerchio intorno al numero di quella frase e ritornatevi sopra dopo. Cercate di finire il più presto possibile. Non ci sono risposte giuste o sbagliate. Perciò rispondete come volete.

- 1) I primissimi ricordi di papà
- 2) Quando sto con mamma mi sento (o penso)
- 3) Quando incontro un uomo, io
- 4) Il mio atteggiamento verso quella ragazza
- 5) La maggior parte della gente
- 6) Quando mi ordinano di fare qualche cosa, io
- 7) Quando sto con papà, mi sento (o penso)
- 8) Il primissimo ricordo di mamma
- 9) Il mio atteggiamento verso quel ragazzo
- 10) Quando incontro una donna, io
- 11) Quando mi presentano alla gente, io
- 12) Di fronte ai superiori
- 13) Quando qualcuno mi prende in giro, io
- 14) Quando sento di non piacere alla gente, io
- 15) Quando non riesco a ottenere quello che voglio, io
- 16) Quando sono criticato dagli altri, io
- 17) Quando la gente fa come se non ci fossi, io
- 18) Quando trovo qualcosa di difficile, io
- 19) Non ho potuto farlo, perchè
- 20) Io temo
- 21) Vado giù di morale quando
- 22) Ho sbagliato a
- 23) Spesso immagino che
- 24) Il mio più grande desiderio è
- 25) Sono scontento di
- 26) Sono preoccupato di
- 27) Mi sento inferiore quando
- 28) Mi sento colpevole quando
- 29) Se io potessi
- 30) Quello di cui ho più bisogno

ているが、筆者は片口らによって作られた反応分類の方式〔東京ロールシャッハ研究会 1964〕を用いて分析を行なった。以下にその大要を説明しておきたい。

1. 対人態度および反応の様式

(問 1-24. 但しわれわれの場合には省略部分があるため、問 1-15, 19-21〔英訳および伊訳版では問 1-18〕の計18問となる)



1) 肯定・積極型 Positive-Active type (Pa)

相手に対して、対等の立場からの愛情、尊敬、好意を持つ場合。また与えられた事態をよるこんで受け入れ、積極的にそれに働きかける場合。

例 問11 “人に紹介されるとき、私は” → 理解しあいたいと思う。

2) 肯定・受動型 Positive-Passive type (Pp)

相手に対して、またその事態に対して肯定的感情をもつが、依存的、受動的である場合。

例 問2 “母といるとき感ずるのは” → 甘えてたよりたいと思う。

3) 中性型 Neutral type (Nu)

肯定・否定のいずれの感情的要素も含まず、単なる叙述に留まる場合。

例 問5 “人にあってたいていかんずることは” → だれにあっても特別の気持はわからない。

4) 否定・積極型 Negative-Active type (Na)

敵意、攻撃などの感情を相手に対し、またその事態につけるもの。

例 問13 “人からかわれたとき” → なぐってやりたいような気がする。

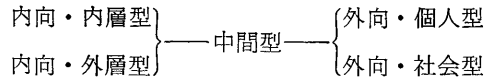
5) 否定・受動型 Negative-Passive type (Np)

恐れ、不安、逃避などの感情を相手に対して抱き、またその事態に打ちひしがれてしまうもの。

例 問13 “人からかわれたとき” → 泣きたいような気持になる。

以上のとおりであるが、実際問題としては Pa と Pp とが非常に接近しあっていて判別しにくい場合が甚だ多い。個人個人について事例研究をすすめる場合であれば、種々の間に対する反応のひとつひとつをさらに質的に分析するので Pa と Pp をいちいち分けることができるのだが、われわれの場合のように集団と集団とを量的に比較することに重点をおいている場合には種々、困難な点が出てくるのでここではいちおう Pa と Pp を分けることをせず一括して P として取り扱うことにした。

2. 問題の原因および願望の様式 (問25-36, 英訳および伊訳版では問19-30)



1) 内向・内層型 Introversive-Deep type

問題の原因をもっぱら自分の内面にむかって探求する場合。内省, 内攻などを含む。

例 問 25 (英伊文版問19) “それがうまくいかなかったわけは” → 私の能力が足りなかったからだ。

2) 内向・外層型 Introversive-Outer type (Io)

問題の原因をいちおう自分に求めるが, 自己の自体的条件その他の外的な条件にその原因を帰しようとするもので, いわば表面的な問題処理の方式をいう。

例 問 25 (英伊文版問19) “それがうまくいかなかったわけは” → 私の身長が低いからだ。

3) 中間型 Neutral type (Nu)

問題の原因を抽象的あるいは宿命的に一般化してしまう型。また自然を対象とする願望がこれに入る。

例 問 25 (英伊文版問19) “それがうまくいかなかったわけは” → 天のさだめの宿命なのだ。

4) 外向・個人型 Extroversive-Individual type (Ei)

問題の原因や責任を他の個人または人びとに帰するもの。また特定の人 (人びと) に関する願望。

例 問 25 (英伊文版問 19) “それがうまくいかなかったわけは” → お父さんがわるいから。

5) 外向・社会型 Extroversive-Social type (Es)

問題の原因を社会, 制度, 環境に帰する反応。また社会, 制度, 環境に関する願望。

例 問 25 (英伊文版問 19) “それがうまくいかなかったわけは” → 社会のしくみがわるいのだ。

以上の通りであるが, この他に反応拒否 (Rej), 内容否認 (D), 内容誤認 (M), 分類不明 (U) などがある。

上に述べてきたような方法を用いて比較分析を行なった結果が次に述べるところであるが, ここでとりあげるイタリアのサンプル数は表 3 に示す通りである。先に述べた理由により, 筆者は今まで一貫して中学 3 年生を対象を統一して資料を集めてい

るので、比較分析の便宜上、この条件にあわない対象はとり除いてある。このため Quercino 村の場合、特に分析の対象となったサンプルの数が極めて少なくなったのは残念であった。

なおイタリアとの比較資料として用いた日本人およびアメリカ人の資料もこの表3にあわせて示してある。この表で日本人の“都市”のサンプルは東京の私立S学園中学の生徒である。この学園は世田谷の高級住宅街にあり、大学短大をもあわせたりベラルな傾向の強い学園で、ここの生徒は東京住宅街の上流ないし中流上層に属している。また“村落”のサンプルとしては、筆者が今まで集めた資料のなかから山梨県北巨摩郡武川村の資料を用いることとした。Quercino 村に類似した山村だからである。なお、ここにあげた日本の資料はいずれも1965年に集めたもので、武川村については当時、明治大学で私の指導していたゼミナールの学生とともに人類学的調査をあわせて行なっている。

またアメリカの資料は1966—67年に米国の大学に客員教授として滞在していたとき、教育委員会を通じて収集した。このうち白人はミシガン州デトロイト市北方に隣接する Pontiac 市の住宅街に住む中流上層の者であり、黒人は同じ地域の黒人スラム街に住む典型的な下層に所属する。なおこの地域は1967年6月、全米で真先に黒人暴動が起って、Black Power 時代のきっかけを作ったところであるが、この地域はたまたま暴動の1カ月前に行なわれることとなった。なお米国人に対しては Mio Kawamura Reynolds 氏によって作られ、同氏が当時ミシガン大学学生相談室においてカウンセリングに際して用いていた英訳版を使用した。

表3 被験者数構成
Tab. 3 Number of Subjects

日本人 (Japanese) TOTAL

| | | | |
|------------------|---|----|-----|
| 都 市 (City) | M | 30 | 73 |
| | F | 43 | |
| 村 落 (Village) | M | 50 | 80 |
| | F | 30 | |
| TOTAL | | | 153 |

アメリカ人 (Americans)

| | | | |
|----------------|---|----|-----|
| 白 人 (White) | M | 32 | 80 |
| | F | 48 | |
| 黒 人 (Black) | M | 37 | 75 |
| | F | 38 | |
| TOTAL | | | 155 |

イタリア人 (Italians)

| | | | |
|------------------|---|----|-----|
| 都 市 (City) | M | 75 | 153 |
| | F | 78 | |
| 町 (Town) | M | 52 | 108 |
| | F | 56 | |
| 村 落 (Village) | M | 17 | 23 |
| | F | 6 | |
| TOTAL | | | 284 |

Ⅲ. 分析の結果

このテストの結果を主要な項目についてのみ分析してみれば次の通りである。

1. 父母に対する態度

1) 問1 “母といるときかんずるのは” の分析結果を示したものが表4である。この表において左側に示したのは問1 に対して、なんらかの有効な回答を記している有効

表4 問1「母といるときかんずるのは」に対する反応分布
(*は有意差の存在を示す。以後の表も同じ)

Tab. 4 Distribution of Responses to Q2 “When I am with my mother I feel”
(In this and other tables, * indicates that the differences are statistically significant.)

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|--------------|-------------|------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 75.9 (22) | 13.8 (4) | 6.9 (2) | 3.4 (1) | 100 (29) |
| | F | 65.2 (30) | 15.2 (7) | 17.4 (8) | 2.2 (1) | 100 (46) |
| 村落 (Village) | M | 56.2 (27) | 27.1 (13) | 10.4 (5) | 6.3 (3) | 100 (48) |
| | F | 70.0 (21) | 16.7 (5) | 10.0 (3) | 3.3 (1) | 100 (30) |
| TOTAL | | (100) | (29) | (18) | (6) | (153) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 50.0 (15) | 20.0 (6) | 6.7 (2) | 23.3 (7) | 100 (30) |
| | F | 47.7 (21) | 22.7 (10) | 11.4 (5) | 18.2 (8) | 100 (44) |
| 黒人 (Black) | M | 80.0 (28) | 17.1 (6) | 0 (0) | 2.9 (1) | 100 (35) |
| | F | 76.3 (29) | 15.8 (6) | 2.6 (1) | 5.3 (2) | 100 (38) |
| TOTAL | | (93) | (28) | (8) | (18) | (147) |

χ^2

df = 3

* 10.0016 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
(< $\chi^2_{0.010} = 11.3449$)

df = 3

* 51.3556 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df = 3

* 38.1049 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 87.8 (65) | 2.7 (2) | 0 (0) | 9.5 (7) | 100 (74) |
| | F | 94.4 (67) | 0 (0) | 4.2 (3) | 1.4 (1) | 100 (71) |
| 町 (Town) | M | 86.0 (43) | 8.0 (4) | 0 (0) | 6.0 (3) | 100 (50) |
| | F | 78.2 (43) | 9.1 (5) | 0 (0) | 12.7 (7) | 100 (55) |
| 村落 (Village) | M | 86.6 (13) | 6.7 (1) | 0 (0) | 6.7 (1) | 100 (15) |
| | F | 100.0 (6) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 100 (6) |
| TOTAL | | (237) | (12) | (3) | (19) | (271) |

回答者数のなかにおける回答の分布《パーセントおよび実数》である。また右側は日本、アメリカ、イタリアの3グループの間、および米国白人と黒人の間の分布の一樣性の検定を行なったものである。*印のついたものが“有意差がある”場合であり、例えばこの表の最上段の*印は、日本人とアメリカ人の間に“自由度3、危険率5%で有意の差が存在する”ことを示している。以下どの表においても同様のあらわしかたを行なっている。なおイタリアの都市、町、村落の3グループの間においては、以下にとりあげた項目に関する限りではいずれも有意の差をみとめ得なかったので、いちいち表にはそのむね記さないこととした。

さてこの表4にみる如く、日本人、アメリカ人、イタリア人の間にはそれぞれ明らかな有意差がみとめられる。イタリア人のPは最も高く、他方、NuとNaは極めて小さい。Npは日本人よりは大きい、アメリカ人に比べると小さい。

つまりイタリア人の場合、母親との心理的結びつきの著しく強いのがなよりの特色であろう。そして更にPの内容をみれば、日本の場合には“安心、やさしい、しあわせ、甘えたい気持”などの答が男女とも多く出ている（但し上記の“甘えたい気持”はある女子の答）。またアメリカでも“secure, relaxed, comforting, happy”などに加えて“protected”などがある。そしてイタリア人においても同じように“安心”(seuro, tranquillo)、しあわせ(felice)、たのしい(allegro)、守られている(protecto)などがあるが、そうした種類の答に加えてさらに“彼女がいなければ生きていけない”(男)、“抱きしめたくなる”(女)、“天使といっしょにいる気がする”(女)など、日本やアメリカには全くみられない表現があり、極めて強いセンチメンタルな依存傾向が母親に対してみとめられることが特色としてうかがわれる。

なおイタリアのジャーナリスト、バルジーニ(Luigi Barzini)が著わして欧米各国でひろく読まれるに到った『イタリア人』のなかでは次のように記してある。

“毎年色っぽい浮気女や、ロマンチックな美人を讃えるのとおなじくらいの流行歌が‘母親’にささげられる。‘お母さん’^{マンマ・ミーア}はいちばんありふれた感嘆詞である……傷ついたイタリア兵は前線の包帯所で、ほとんど聞きとれないように、‘マンマ、マンマ’と怪我をした子供のようにうめく。死刑を宣告された兵士は、銃殺隊の発砲を待ちながら‘マンマ’というのだ”[バルジーニ 1965: 234-235]。

谷氏によれば、母親のほうでも子どもを他人に語るときには“私の宝物”(tesoro)などと言った表現でよぶし、たしかに情緒的な母子の結びつきは著しく強いという。アメリカ、イギリスなどのアングロ・サクソン系の国々における如く、夜間、子どもをbaby-sitterにたのんで外出するなどのことは全くなく、母親は常に子どもを保護

しながら家庭にあるべきだという考え方が一般であるらしい。再びバルジーニの本から引用してみれば次の通りである。

“イタリアの母親が赤ん坊を愛撫するのをよく見ていただきたい。一人きりだと、彼女はどの母親とも同じように、ありのままのやり方で、やさしく熱心である。ところが誰かが部屋に入ってきたとたんに、彼女は慈愛あふれる、母性愛の化身を演じてみせる。その顔は、ふいに輝き、情愛の涙が両眼にあふれ、赤ん坊を胸にひしと抱きしめ、歌を歌ってやるかと思えばはほずりをしてやり、詩にでもありそうな愛称をこしらえだすのだ”。[バルジーニ 1965: 150]

著者バルジーニはここではむしろイタリア人の演技性の例として母親のふるまいかたを述べているのだが、母親が子どもに対して愛撫の表現を示すことが一般の人びとの間で“強く期待される行動型”となっている事実を彼の記述からみることができる。

なお再びテスト結果にもどれば、イタリア人の N_p は日本人よりは大きい、アメリカ人よりは小さい。アメリカ人においては特に白人の間で男女ともに著しく N_p が大きくなっているが、これは中流上層に所属する彼等の家庭において母親のしつけがきびしく、家庭内の発言力も強く、いわばコワイ存在となっているからであろう。これに対して黒人の母親はそれほどコワクはない。いわば親しめる存在になっていると考えられる。白人と黒人の間には明らかな有意差があり、黒人の P はイタリア人ほどではないが相当高いことがみとめられる。

これに対して日本の今日の母親は決してコワイ存在ではない。この傾向は特に都市においてみとめられる。

イタリア人の場合はちょうど米国白人と日本人の中間に位置するのであって、逃げごしの回避反応を示している者が若干みられる。

2) 次に問7“父といるときいつもかんずることは”についてみると表5にみられる通りである。

すなわち父については日本人とアメリカ人の間に有意の差はみとめられない。母の場合は明らかな差があったのに対して、父に関しては両者のパターンが類似するに到っているのはまず注目すべき点であろう。

しかしイタリアと日本、イタリアとアメリカの間には明らかな有意差が存在している。そして父親の場合においても母親の場合と同じくイタリア人の P は最高で、 N_u と N_a は著しく少ない。といってもイタリア人の父に対する P は母親に対する P より小さい。但し、これは米国人の女子を除いては他のすべてのグループに共通する特色で、イタリアの場合も母に対する親しさのほうが父に対するそれよりも大きいこと

表5 問7「父といるときいつもかんずることは」に対する反応分布

Tab. 5 Distribution of Responses to Q7 "When I am with my father, I feel"

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 53.3 (16) | 26.7 (8) | 10.0 (3) | 10.0 (3) | 100 (30) |
| | F | 59.5 (22) | 10.8 (4) | 16.2 (6) | 13.5 (5) | 100 (37) |
| 村落 (Village) | M | 52.2 (24) | 28.3 (13) | 10.9 (5) | 8.7 (4) | 100 (46) |
| | F | 53.6 (15) | 7.1 (2) | 21.4 (6) | 17.9 (5) | 100 (28) |
| TOTAL | | (77) | (27) | (20) | (17) | (141) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 42.0 (13) | 16.1 (5) | 16.1 (5) | 25.8 (8) | 100 (31) |
| | F | 58.7 (27) | 15.2 (7) | 8.7 (4) | 17.4 (8) | 100 (46) |
| 黒人 (Black) | M | 74.3 (26) | 14.3 (5) | 2.9 (1) | 8.6 (3) | 100 (35) |
| | F | 62.5 (20) | 12.5 (4) | 15.6 (5) | 9.4 (3) | 100 (32) |
| TOTAL | | (86) | (21) | (15) | (22) | (144) |

χ^2

df = 3

2.5711 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$

df = 3

* 51.9344 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df = 3

* 32.5946 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
< $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|-------------|------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 85.9 (55) | 1.6 (1) | 1.6 (1) | 10.9 (7) | 100 (64) |
| | F | 75.7 (53) | 11.4 (8) | 1.4 (1) | 11.4 (8) | 100 (70) |
| 町 (Town) | M | 90.2 (46) | 0 (0) | 3.9 (2) | 5.9 (3) | 100 (51) |
| | F | 73.6 (39) | 5.7 (3) | 0 (0) | 20.8 (11) | 100 (53) |
| 村落 (Village) | M | 86.7 (13) | 6.7 (1) | 0 (0) | 6.7 (1) | 100 (15) |
| | F | 100.0 (6) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 100 (6) |
| TOTAL | | (212) | (13) | (4) | (30) | (259) |

がわかる (米国白人の女子の場合においては、母親はこわいが、父親は親しみ易いという関係が成立しているのであろう)。

なお Np についてみると、上の P とは大体逆の関係が成立しており、米国白人の女子を除いてはいずれも父親に対する Np の方が母親に対する Np よりも大きい。但し父に対するイタリア人の Np は全体としてみればアメリカと日本の双方よりも更に低くなっている。

なおイタリア人の P の内容をみれば、母の場合とは違って、日本やアメリカとの間に質的な差異はみとめられない。こうしてみると要するにイタリア人における父親

に対する感情は日米に比してはるかに positive であるが、しかし母親に対する如き、センチメンタルな依存的傾向はみとめられないように思われる。

再び谷氏によれば、イタリアでは子どもたちは独立してからもたえず父母の家を訪れるのが普通であり、このため、遠く離れた土地へ転勤を命ぜられたりすると、これを嫌ってその会社をやめてしまって近くの会社へ移ることは決して珍しくはないという。このため、イタリアでは世界中でも極めて mobility の少ない国であり、日本

表6 問11「人に紹介されるとき私は」に対する反応分布

Tab. 6 Distribution of Responses to Q11 "When I am introduced to people"

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|-------------|----------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 29.4 (10) | 23.5 (8) | 0 (0) | 47.1 (16) | 100 (34) |
| | F | 42.9 (18) | 19.0 (8) | 0 (0) | 38.1 (16) | 100 (42) |
| 村落 (Village) | M | 26.2 (11) | 14.3 (6) | 0 (0) | 59.5 (25) | 100 (42) |
| | F | 46.4 (13) | 21.4 (6) | 0 (0) | 32.2 (9) | 100 (28) |
| TOTAL | | (52) | (28) | (0) | (66) | (146) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

↑ ↑
(Na + Np = 66)

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|------------|------------|--------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 62.5 (20) | 6.3 (2) | 6.3 (2) | 25.0 (8) | 100 (32) |
| | F | 70.8 (34) | 2.1 (1) | 2.1 (1) | 25.0 (12) | 100 (48) |
| 黒人 (Black) | M | 65.7 (23) | 8.6 (3) | 0 (0) | 25.7 (9) | 100 (35) |
| | F | 68.4 (26) | 5.3 (2) | 0 (0) | 26.3 (10) | 100 (38) |
| TOTAL | | (103) | (8) | (3) | (39) | (153) |

↑ ↑
(Na + Np = 42)

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|------------|------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 58.7 (37) | 1.6 (1) | 3.2 (2) | 36.5 (23) | 100 (63) |
| | F | 56.9 (41) | 5.6 (4) | 0 (0) | 37.5 (27) | 100 (72) |
| 町 (Town) | M | 52.0 (26) | 8.0 (4) | 0 (0) | 40.0 (20) | 100 (50) |
| | F | 45.5 (25) | 1.8 (1) | 1.8 (1) | 50.9 (28) | 100 (55) |
| 村落 (Village) | M | 58.8 (10) | 0 (0) | 0 (0) | 41.2 (7) | 100 (17) |
| | F | 66.7 (4) | 0 (0) | 0 (0) | 33.3 (2) | 100 (6) |
| TOTAL | | (143) | (10) | (3) | (107) | (263) |

↑ ↑
(Na + Np = 110)

χ^2

df = 2

* 33.0793 > $\chi^2_{0.050} = 5.99147$
> $\chi^2_{0.005} = 10.5966$

df = 2

* 31.0658 > $\chi^2_{0.050} = 5.99147$
> $\chi^2_{0.005} = 10.5966$

df = 2

* 10.012 > $\chi^2_{0.050} = 5.99147$
(> $\chi^2_{0.010} = 9.21034$)

に比べてもはるかに少ない mobility が特色であるという。

なお godfather を中心としたシシリー島出身のマフィアの一族の間における著しく強い結びつきは小説、映画その他によってもよく知られるところであるが、親と子の強い団結はイタリア社会の特色として考えてよいであろう。但しそうした家族主義的な一族の団結も、親の死亡とともに財産争いという形で内紛がおこり、結局はバラバラになって崩壊していく場合が少なくないと言われる。

2. 未知の他人に対する態度

問3 “人に紹介されるとき私は” に対する反応は日本、アメリカ、イタリア人において有意の差を示している（表6）。この場合、イタリア人の P は日本人よりはずっと大きい、アメリカ人よりは小さい。“sociable” で開放的なことをもって知られるアメリカ人と比べれば、イタリア人の P は下まわるといことであろう。

なお日本人においては男と女の P の差が著しく、男子が非常にうちとけにくいのに対して女子ははるかに大きな P を示している。アメリカ人の場合は日本ほどの差はないが、女子の P は男子の P よりやや大きい。これに対してイタリア人の場合のみ男子の P が女子の P を上まわっている。たしかにイタリア人の女子は男子に比べて相当程度に shy な傾向がみとめられることは谷氏も指摘するところであり、こうした特色が反映しているものと思われる。

3. 異性に対する態度

男子の場合には問10 “女の人に会うとき私は…”，女子の場合には問3 “男の人に会うとき私は…” についてみると表7のような結果になる。

まずアメリカと日本、イタリアと日本の間には明らかに有意の差が存在し、日本の場合の P の少なさ、つまり異性に対する積極的な打ちとけかたの著しく少ない点が目立つのである。

しかし次にイタリアとアメリカを比べてみれば両者の間に有意差は存在していない。イタリアの場合、男子は極めて P が高いのに対して女子は N_p が高くなっている（日本の男子を除けば全グループ中で最大の N_p を示している）。しかしアメリカにおいても、白人の男子はイタリアの男子よりもっと高い P を出しており、他方アメリカの女子は白人黒人とも案外に N_p が高い。かくてイタリアとアメリカの傾向は類似し、イタリアの型は決してイタリア特有のものではないことがわかる（表7では念のため男子ごと、女子ごとにイタリア、アメリカ両グループ間の分布の一様性を χ^2 検定し

表 7 異性に対する態度分布 (男子では問10, 女子では問3に対する反応分布)

Tab. 7 Distribution of Attitudes toward the Opposite Sexes (Distribution of Responses to Q10 in the case of male subjects and those to Q3 in the case of female subjects)

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 35.7 (10) | 21.4 (6) | 0 (0) | 42.9 (12) | 100 (28) |
| | F | 31.6 (12) | 36.8 (14) | 10.5 (4) | 21.1 (8) | 100 (38) |
| 村落 (Village) | M | 27.3 (12) | 40.9 (18) | 0 (0) | 31.8 (14) | 100 (44) |
| | F | 12.5 (3) | 62.5 (15) | 4.2 (1) | 20.8 (5) | 100 (24) |
| TOTAL | | (37) | (53) | (5) | (39) | (134) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

(Na + Np = 44)

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|--------------|------------|--------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 82.7 (24) | 6.9 (2) | 3.4 (1) | 6.9 (2) | 100 (29) |
| | F | 51.1 (24) | 19.2 (9) | 2.1 (1) | 27.6 (13) | 100 (47) |
| 黒人 (Black) | M | 50.0 (18) | 36.2 (13) | 0 (0) | 13.8 (5) | 100 (36) |
| | F | 52.7 (19) | 16.7 (6) | 0 (0) | 30.6 (11) | 100 (36) |
| Total | M | (42) | (15) | (1) | (7) | (65) |
| Total | F | (43) | (15) | (1) | (24) | (83) |
| TOTAL | | (85) | (30) | (2) | (31) | (148) |

(Na + Np = 33)

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|--------------|----------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 74.6 (50) | 23.9 (16) | 0 (0) | 1.5 (1) | 100 (67) |
| | F | 36.6 (26) | 23.9 (17) | 0 (0) | 39.4 (28) | 100 (71) |
| 町 (Town) | M | 68.0 (35) | 28.0 (14) | 0 (0) | 4.0 (2) | 100 (51) |
| | F | 35.2 (19) | 29.6 (16) | 0 (0) | 35.2 (19) | 100 (54) |
| 村落 (Village) | M | 73.3 (11) | 13.3 (2) | 0 (0) | 13.3 (2) | 100 (15) |
| | F | 66.6 (4) | 33.3 (2) | 0 (0) | 0 (0) | 100 (6) |
| Total | M | (96) | (32) | (0) | (5) | (133) |
| Total | F | (49) | (35) | (0) | (47) | (131) |
| TOTAL | | (145) | (67) | (0) | (52) | (264) |

{ Na + Np = 52 }
M (5)
F (47)

χ^2

df = 2

* 26.8297 > $\chi^2_{0.050} = 5.99147$
> $\chi^2_{0.005} = 10.5966$

df = 2

* 26.7831 > $\chi^2_{0.050} = 5.99147$
> $\chi^2_{0.005} = 10.5966$

df = 2

1.4693 < $\chi^2_{0.050} = 5.99147$

df = 2

5.2355 < $\chi^2_{0.050} = 5.99147$

df = 2

4.5775 < $\chi^2_{0.050} = 5.99147$

ているが、有意差はみとめられなかった)

しかし次にその答の内容をみればイタリアの男子の答は特徴的であり、“彼女を賞讃する、うやまう”などの形はアメリカではみられない。つまりイタリアでは男子は女子の前で必ず相手を賞めたたえた挨拶をせねばならない。もしそれができなければ男子としてのエチケットを知らぬ者として評価はひどくさがるのである。イタリア系アメリカ人のジャーナリスト、Low D'Angelo はイタリアの男性の持つ最大の特徴のひとつは相手の女性を大げさに賞めたたえる“flattery”の技術にあると述べている [D'ANGELO 1968: 72-74]。かくて女性への積極的な働きかけは、なかば“制度化されたパターン”となって中学生の頃から発達しているということであろう。

他方、イタリアの女子の答の内容も“赤面する、逃げ出す、かけ去る、すぐにみちを変え”等々であって、軽い shyness の答を出しているアメリカとの間に差異がみとめられ、これまた女子の間のパターン化された行動様式であるように思われる。なおイタリアの女子の Nu のなかには“無関心”という答が多いのであるが、これは“無関心であるかの如く振舞う”というニュアンスもあると思われるし、従って Np としても解釈できる。もしこれらをすべて Np として計算すれば、イタリアの女子の Np は更に極めて大きくなる。カトリックの伝統のなかにおいて女子は帰宅が遅かったりすればすぐに母親からきびしく叱責されるなどのことがあるわけで、もっと保守性の強いスペイン、ポルトガルに比べればまだゆるやかであるにせよ、アングロ・サクソンの国々とはだいぶん状況の異なることが推察される。再びここでバルジーニの記述に眼をむけよう。

“家長、あるいは家のあとつぎであるイタリアの男性たちはその男らしさゆえに、世界中に相応の名声を博している。彼は、自分の独立をまもるために油断なく目を光らせる。どんな女性といえども、男を自分の意志に従わせるわけにはいかない。イタリア男の自尊心のほどは誰の目にもはっきりとよみとれる。……やや伏せた眼の隅から、美女をながし目でみる態度のあの尊大さはどうだ！ たしかにイタリアの男は万物の主である。それでは、女とはなんだろう？……男性を楽しませ慰めるために地上につかわされたのである。……‘女は’と古いイタリアの諺はいつている。‘卵のようなものだ。ぶたれるほど (beat は打つと卵をかきまぜるの意味がある) よくなる。’

当然のことながらイタリア人は、女を服従させることができなかつたり、女どもが勝手気ままにふるまうのを許している他国人に同情する。……イタリアの女は、夫の私生活についてほとんどなにもしらない。愛人がいるのだろうか？ 二人いるのかしら？ 夫は特定の情事レズンがきれると次にうつるタイプかしら、それとも、同時にいく人

もこしらえるタイプかしら？ 彼女がこんな疑いにさいなまれることはない。たまさか嫉妬を抱くだけである。疑惑は、ほとんど彼女を傷つけない。妻は、夫が家にもどってくるのを信じて待ち、なんでも彼が話してくれることで満足する。

さて、女房族はどうかといえば、彼女らは非常に慎重でなくてはならないし、ほかの男を見てさえいけないことを承知している。もし禁を犯せば、女は厳しいお仕置きと三下り半に値し、珍しくもないことだが、殺されることだってあるのだ。” [バルジャーニ 1965: 230-231]

なおアメリカでもイタリアからの留学生やイタリア系アメリカ人の男は異性関係において極めて積極的であることを以てよく知られ、しばしば語り草にされ、“彼はイタリア系だから用心しなさいよ”と女性は仲間どうし戒めあう。逆にイタリア系アメリカ人の女性はやはり保守的な色彩が強いと言ってよいように思われる。

4. 権威に対する態度

問21 “権威のある人は” に対する反応は表8に示される通りで、これもまた日本、アメリカ、イタリアの間に明確な有意差がみとめられる。アメリカ人特に白人男子においてはPが著しく小さく、逆にNaが非常に大きく、権威に対する反発が強いものに対して、日本人では相当にPが強くなっている。ところが更にイタリア人となれば、8割もの者がPを示しているのであって、反発的態度は殆んどみとめられない。

谷氏はこうした権威への態度はまさにイタリア人の特徴であり、父親への態度とそしてまたカトリックの教会と司祭に対する態度に深く関連すると解釈する。父親に対する態度についてはすでに前項で述べたためここではくり返さないが、カトリックの教会と司祭に関しては、彼等を通じてでないと解決できないことが少なくないからだという。こうしたカトリック教会と司祭の存在に加えてもうひとつイタリア社会の特色となっているものは、すべての職業における、いわゆる“コネ”の重要性であるという。いくら成績がよくてもコネがなければだめであり、逆に成績は悪くても、親せきなどを通じての有効なコネさえあれば就職その他、すべてうまくいくのがイタリア社会だと言われる。だから就職試験の成績をあげようと努力するよりは、すべてを“権威ある者”にまかせておけば自動的にうまく進んでいくのだということになる。

こんなところから、日本にみられる如き、いわゆる親分子分間の結びつきは大へん強い。“あの人には世話になっているから負い目 (debito) がある。だからあの人のためにやってやらなければ……” という考え方は相当強い心理的因子として働いているし、当然守るべきこととして一般に考えられている。但しこうした負い目の因子だけ

表 8 問12 “権威のある人は” に対する反応分布
Tab. 8 Distribution of Responses to Q12 “People with authority”

日本人 (Japanese)

| | | P | Na | Nu | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|-------------|--------------|------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 42.3 (11) | 26.9 (7) | 30.8 (8) | 0 (0) | 100 (26) |
| | F | 41.7 (10) | 25.0 (6) | 33.3 (8) | 0 (0) | 100 (24) |
| 村落 (Village) | M | 56.1 (23) | 4.9 (2) | 36.6 (15) | 2.4 (1) | 100 (41) |
| | F | 42.3 (11) | 23.1 (6) | 34.6 (9) | 0 (0) | 100 (26) |
| TOTAL | | (55) | (21) | (40) | (1) | (117) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 20.0 (6) | 20.0 (6) | 53.3 (16) | 6.7 (2) | 100 (30) |
| | F | 35.6 (16) | 20.0 (9) | 33.3 (15) | 11.1 (5) | 100 (45) |
| 黒人 (Black) | M | 37.5 (12) | 18.8 (6) | 40.6 (13) | 3.1 (1) | 100 (32) |
| | F | 45.2 (14) | 22.6 (7) | 19.3 (6) | 12.9 (4) | 100 (31) |
| TOTAL | | (48) | (28) | (50) | (12) | (138) |

χ^2

df=3
* 10.2342 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|--------------|------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 74.1 (43) | 17.2 (10) | 0 (0) | 8.6 (5) | 100 (58) |
| | F | 80.3 (57) | 4.2 (3) | 2.8 (2) | 12.7 (9) | 100 (71) |
| 町 (Town) | M | 83.3 (40) | 10.4 (5) | 4.2 (2) | 2.1 (1) | 100 (48) |
| | F | 85.7 (48) | 5.4 (3) | 1.8 (1) | 7.1 (4) | 100 (56) |
| 村落 (Village) | M | 87.5 (14) | 0 (0) | 6.3 (1) | 6.3 (1) | 100 (16) |
| | F | 100.0 (6) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 100 (6) |
| TOTAL | | (208) | (21) | (6) | (20) | (225) |

df=3
* 92.9225 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df=3
* 112.7311 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

で行動している人の評価はしだいに低くなりがちだ。谷氏はこのように解釈している。

次にこうした権威への従属心とからみ合っているものとして、手紙などにおける敬語の用いかけた、本などの贈呈のときの“献辞”の使い方は極めて複雑であるが、この点についてはバルジーニがやや違った角度からやや異なったみかたで次のように述べている。

“儀礼上の嘘やお世辞は、時には功利的に使うこともできるが、率直にいったいの場合、人生を上品に気持良くすることだけを目的とした方便に分類すべきである。それは人間関係をいっそう円滑にする潤滑油である。お世辞というものは、最高

に用心深い人間でも、なんとなく自分をもっと偉くて、自信にみちているように感じさせ、そのためにいっそう、御当人を寛大に親切に、そしてほとんど高潔な人間にさせる。イタリアではそれは、たいして注意をはられないぐらいの日常茶飯事である。……イタリア人があなたの指図にしたがう熱心さの中には、ほとんど気づかないほどのお追従があるし、特別経験のない問題について忠告を求められるときには、かすかなへつらいが含まれているのだ。

それはまた月並みのものをふくめて、さまざまな敬称にも使われる。……中産階級の男なら、青年時代には‘先生’^{ドットレ}と呼ばれ、40才をすぎると‘上級勲爵士’^{ヨングートレ}と呼ばれる。ありきたりの手紙の呼びかけにさえ、‘もっともすぐれたる’とか‘輝かしき名声高き’‘卓越せる’‘世に聞えたる’^{シニョーレ}お方、さまなければ簡単に‘気高き人’^{ノビル・ウオモ}を略したN.H.が使われる。

洋服屋は体格をほめる。歯医者者は叫ぶ。‘あなたは古代ローマ人の歯をしている！’……” [バルジーニ 1965: 92]

こうした角度から眺めてみるとイタリア人の権威に対する態度は決して心からの従属とは言えまい、むしろ功利性にむすびつく要素が大きいように思われる。その点が日本における自己を捨てての義理人情の人間関係とは大きく異なるものと言える。第二次大戦中にムッソリーニに従い、それが落ち目になるとただちに反逆してその屍体までムチ打った所にイタリア人の心理と行動の特色をみることができようが、この点についてバルジーニはムッソリーニの伝記を書いたパオロ・モネリのことばをそのまま引用している。“イタリア人は、むかし自分たちが夢中になって賞めそやしたカルソーヤ、タマーニョのようなテノール歌手を、ムッソリーニの中に認めていたにすぎなかった。テノール歌手に接するのと同様、民衆はムッソリーニの言葉に何の注意も払わず、その見事な長い語調や節回しに聞きほれた。……” [バルジーニ 1965: 168-169]。その意味ではナチスのヒトラーの場合とは事情が異なっていたと言ってよからう。こうしてみると、日本における義理人情関係との更に詳しい比較分析が必要であるように思われる。

5. 他人からの攻撃に対する態度

問13 “人にからかわれたとき” に対する反応は表9にみられる通り、日本、アメリカ、イタリアの間に明確な有意差がみとめられるが、イタリア人はNaの著しく大きいのが特色である。この傾向は男女とも同等に強く、日本、アメリカでは、大体において女子の方がNaの度合いが弱いので、女子どうしを互いに比較すればイタリア

の女子は他に例がないほど Na が強いという結果になる。

またその内容をみれば、男子の間で“ぶつ、一発くらわす、顔をぶんなぐる、平手打ちをくらわす、鼻ヅラをへしおる、たたきのめす、目に一発、殺してやる…”など極めて烈しい表現が多く、他方、女子の間でも“ピンタ、平手うち”という答がたくさんある。こうしたいわば、直接的に“手”にうったえる反発の方式を答えているのは男子計14名、女子でも13名に達しているのであるが、これに対してアメリカでこの種の答を出しているのは白人の男子2名、黒人の男子3名、黒人女子1名。また日本では都市の男子5名、村落の男子6名、そして女子は都市の女子1名のみであった。

表9 問13 “人からかわれたとき” に対する反応分布

Tab. 9 Distribution of Responses to Q13 “When people laugh at me”

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 6.7 (2) | 16.7 (5) | 76.7 (23) | 0 (0) | 100 (30) |
| | F | 2.3 (1) | 39.6 (17) | 37.2 (16) | 20.9 (9) | 100 (43) |
| 村落 (Village) | M | 4.5 (2) | 36.4 (16) | 52.3 (23) | 6.8 (3) | 100 (44) |
| | F | 3.3 (1) | 20.0 (6) | 56.7 (17) | 20.0 (6) | 100 (30) |
| TOTAL | | (6) | (44) | (79) | (18) | (147) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 29.0 (9) | 3.2 (1) | 42.0 (13) | 25.8 (8) | 100 (31) |
| | F | 20.8 (10) | 6.3 (3) | 33.3 (16) | 39.6 (19) | 100 (48) |
| 黒人 (Black) | M | 10.8 (4) | 16.2 (6) | 48.7 (18) | 24.3 (9) | 100 (37) |
| | F | 21.1 (8) | 7.9 (3) | 28.9 (11) | 42.1 (16) | 100 (38) |
| TOTAL | | (31) | (13) | (58) | (52) | (154) |

χ^2
 $df=3$
* 53.3509 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|-------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 2.7 (2) | 17.8 (13) | 75.3 (55) | 4.1 (3) | 100 (73) |
| | F | 2.8 (2) | 13.9 (10) | 73.6 (53) | 9.7 (7) | 100 (72) |
| 町 (Town) | M | 7.8 (4) | 9.8 (5) | 60.8 (31) | 21.6 (11) | 100 (51) |
| | F | 7.3 (4) | 18.2 (10) | 60.0 (33) | 14.5 (8) | 100 (55) |
| 村落 (Village) | M | 0 (0) | 29.4 (5) | 64.7 (11) | 5.9 (1) | 100 (17) |
| | F | 16.7 (1) | 16.7 (1) | 50.0 (3) | 16.7 (1) | 100 (6) |
| TOTAL | | (13) | (44) | (186) | (31) | (274) |

$df=3$
* 12.0132 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.010} = 11.3449$
 $df=3$
* 68.4175 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

なおアメリカの男子の間の答としては“knock them, hit them, beat them up”など。黒人の女子1名の答は“kick them”また日本の男子の間における答は“ぶんなぐってやる, はりとばしてやりたくなる, たたきのめしたい”など。女子1名の答は“ホオをひっぱたきたくなる”であった。こうしてみるとイタリア人の間の反応はやはり相当に強烈で、いわば“血の気の多い”ラテン的な性格がよくあらわれていると思われ、他国と比較したとき、特に女子の間においてその特色が目立っているとみてよいであろう。

なおこの点についてバルジーニの次の指摘は関連性があるように思われる。“イタリアは血潮に染められた国である。毎日のように、嫉妬に狂った夫は、不義の妻や愛人を殺し、同じくらの妻が、浮気の夫やその情婦を殺害する。……何世紀来、愛情のもつれで起こった、この絶え間ない大虐殺は……多くの人命を犠牲にしてきた”[バルジーニ 1965: 127]。この表現にはいささか誇張があるとは言え、現にマフィアの間には極めて残虐な殺し合いが行なわれているし、やはりこうしたイタリア的特色の存在をみとめることが出来よう。但し現実の社会においては、人にかからわれたときでもそうすぐに暴力に訴えるわけではなく、その代り、口で猛烈に悪罵をあげせかけるということであるらしい。そのためにイタリアでは悪態語が非常に発達していることを谷氏は指摘している。

しかしいずれにせよ、こうした“からかい”に対する烈しい反発心の基盤になっているものとして、イタリア人の強い名誉心をあげることができる。“恥知らず奴!”ということばが非常に強い非難のことばとして存在しているようであるが、彼等の間における“恥”の観念と日本人の間における“恥”の観念の類似点と相違点については、今後更に分析してみる必要がありそうに思われる。

6. 他人からの拒絶に対する態度

1) 問14 “他人が私を好いていないと感じるとき”に対する反応(表10)は日本、アメリカ、イタリアの間で明確な有意差を示しており、イタリア人は Np の著しく大きいのが特色である。特に男子は70~90%が Np を示し(女子は50%台)ているが、その反面、Na は極めて小さい。さきに述べた如く、“人にかからわれたとき”の反応においては Na が著しく大きかったのであるが、その場合とは異なり、このように“他人から好かれぬ”となると甚だしい孤独感を抱いてシュンとなってしまうことがうかがわれる。

なお同じアメリカ人のなかにおいても白人黒人間に有意差があって、黒人男子は

表10 問14 “他人が私を好いていないと感ずるとき” に対する反応分布
 Tab. 10 Distribution of Responses to Q14 “When I feel that people do not like me, I”

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 26.7 (8) | 16.7 (5) | 23.3 (7) | 33.3 (10) | 100 (30) |
| | F | 39.5 (17) | 11.6 (5) | 9.3 (4) | 39.6 (17) | 100 (43) |
| 村落 (Village) | M | 24.0 (12) | 24.0 (12) | 30.0 (15) | 22.0 (11) | 100 (50) |
| | F | 21.4 (6) | 35.7 (10) | 25.0 (7) | 17.9 (5) | 100 (28) |
| TOTAL | | (43) | (32) | (33) | (43) | (151) |

上段数字：パーセント (%)
 () 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 18.8 (6) | 18.8 (6) | 31.3 (10) | 31.3 (10) | 100 (32) |
| | F | 22.9 (11) | 27.1 (13) | 14.6 (7) | 35.4 (17) | 100 (48) |
| 黒人 (Black) | M | 19.4 (7) | 8.3 (3) | 47.4 (17) | 24.9 (9) | 100 (36) |
| | F | 0 (0) | 37.8 (14) | 32.4 (12) | 29.8 (11) | 100 (37) |
| TOTAL | | (24) | (36) | (46) | (47) | (153) |

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 14.7 (10) | 7.4 (5) | 7.4 (5) | 70.6 (48) | 100 (68) |
| | F | 16.2 (11) | 26.5 (18) | 7.3 (5) | 50.0 (34) | 100 (68) |
| 町 (Town) | M | 3.9 (2) | 17.6 (9) | 2.1 (1) | 76.5 (39) | 100 (51) |
| | F | 13.3 (7) | 28.3 (15) | 7.5 (4) | 50.9 (27) | 100 (53) |
| 村落 (Village) | M | 0 (0) | 0 (0) | 5.9 (1) | 94.1 (16) | 100 (17) |
| | F | 16.7 (1) | 16.7 (1) | 16.7 (1) | 50.0 (3) | 100 (6) |
| TOTAL | | (31) | (48) | (17) | (167) | (263) |

χ^2

df=3

* 7.9271 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
 (< $\chi^2_{0.010} = 11.3449$)

df=3

* 57.3855 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
 > $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df=3

* 58.2289 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
 > $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

Na が極めて大きいのが特色で(彼等の Na は全体のなかで最高)、黒人女子となれば P はゼロ。代わりに Nu が最大となる。ここに彼等の cool and reserved といった特色がみとめられるのではないかと思われる。

また同じ日本人でも都市と村落の間には有意差があって Np は都市において大きく、村落で小さくなっている。都市における神経のこまかさ、気弱さがうかがわれるとみてよいであろう。

2) 問20 (英訳版伊訳版では問17) “人が私を相手にしてくれないとき” の反応は表11の通りであるが、前述の間14より更に度の強くなった拒絶がこれにあたる。アメリ

表11 問20 (英訳版伊訳版では問17) “人が私を相手にしてくれないとき”
に対する反応分布

Tab. 11 Distribution of Responses to Q17 “When people ignore me, I”

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|------------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 都 市 (City) | M | 15.2 (5) | 15.2 (5) | 18.1 (6) | 51.5 (17) | 100 (33) |
| | F | 0 (0) | 26.2 (11) | 26.2 (11) | 47.6 (20) | 100 (42) |
| 村 落 (Village) | M | 23.4 (11) | 23.4 (11) | 31.9 (15) | 21.3 (10) | 100 (47) |
| | F | 13.8 (4) | 17.2 (5) | 31.0 (9) | 37.9 (11) | 100 (29) |
| TOTAL | | (20) | (32) | (41) | (58) | (151) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|----------------|---|-------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 白 人 (White) | M | 15.6 (5) | 3.1 (1) | 62.5 (20) | 18.8 (6) | 100 (32) |
| | F | 6.3 (3) | 25.0 (12) | 43.8 (21) | 25.0 (12) | 100 (48) |
| 黒 人 (Black) | M | 16.2 (6) | 13.5 (5) | 56.8 (21) | 13.5 (5) | 100 (37) |
| | F | 5.4 (2) | 10.8 (4) | 59.5 (22) | 24.3 (9) | 100 (37) |
| TOTAL | | (16) | (22) | (84) | (32) | (154) |

χ^2

 $df=3$
* $24.5724 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$
 $> \chi^2_{0.005} = 12.8381$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|------------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 都 市 (City) | M | 11.9 (8) | 20.9 (14) | 25.4 (17) | 41.8 (28) | 100 (67) |
| | F | 17.2 (11) | 14.1 (9) | 17.2 (11) | 51.6 (33) | 100 (64) |
| 町 (Town) | M | 14.9 (7) | 17.0 (8) | 34.0 (16) | 34.0 (16) | 100 (47) |
| | F | 20.4 (11) | 14.8 (8) | 18.5 (10) | 46.3 (25) | 100 (54) |
| 村 落 (Village) | M | 23.5 (4) | 0 (0) | 35.3 (6) | 41.2 (7) | 100 (17) |
| | F | 16.7 (1) | 33.3 (2) | 33.3 (2) | 16.7 (1) | 100 (6) |
| TOTAL | | (42) | (41) | (62) | (110) | (255) |

$df=3$
 $2.8387 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$

$df=3$
* $41.1114 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$
 $> \chi^2_{0.005} = 12.8381$

カ人の間では白人黒人とも Na が著るしく大きいのに対して、日本人およびイタリア人は共に Np が非常に大きい。この点では日本人、イタリア人は互いに類似したパターンを示している。しかしその Np の度合はイタリア人の方において大きく、言い換えれば彼等の Np は全体のなかでの最高で、前述の問13の場合と同じ特色がうかがわれる。アメリカ人と日本人の間、そしてまたアメリカ人とイタリア人の間には有意差がみとめられるのに、日本人とイタリア人の間に有意差の存在していないのはこのためであろう。

3) 問19 “人から批判されたとき” の結果が表12である。いま論じた “相手にしてく

表12 問19 (英訳版伊訳版では問16) “人から批判されたとき私は”
に対する反応分布

Tab. 12 Distribution of Responses to Q16 “When I am criticized by others, I”

日本人 (Japanese)

| | | P | Nu | Na | Np | Total |
|-----------------|---|------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 6.7 (2) | 16.7 (5) | 76.7 (23) | 0 (0) | 100 (30) |
| | F | 2.3 (1) | 39.6 (17) | 37.2 (16) | 20.9 (9) | 100 (43) |
| 村落 (Village) | M | 4.5 (2) | 36.4 (16) | 52.3 (23) | 6.8 (3) | 100 (44) |
| | F | 3.3 (1) | 20.0 (6) | 56.7 (17) | 20.0 (6) | 100 (30) |
| TOTAL | | (6) | (44) | (79) | (18) | (147) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|--------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 40.0 (12) | 10.0 (3) | 46.7 (14) | 3.3 (1) | 100 (30) |
| | F | 33.4 (16) | 12.5 (6) | 33.4 (16) | 20.7 (10) | 100 (48) |
| 黒人 (Black) | M | 23.5 (8) | 11.8 (4) | 44.1 (15) | 20.6 (7) | 100 (34) |
| | F | 21.1 (8) | 7.9 (3) | 28.9 (11) | 42.1 (16) | 100 (38) |
| TOTAL | | (44) | (16) | (56) | (34) | (150) |

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 22.2 (14) | 14.3 (9) | 46.0 (29) | 17.5 (11) | 100 (63) |
| | F | 17.2 (11) | 21.9 (14) | 37.5 (24) | 23.4 (15) | 100 (64) |
| 町 (Town) | M | 18.0 (9) | 16.0 (8) | 40.0 (20) | 26.0 (13) | 100 (50) |
| | F | 18.2 (10) | 20.0 (11) | 45.4 (25) | 16.4 (9) | 100 (55) |
| 村落 (Village) | M | 18.8 (3) | 0 (0) | 62.5 (10) | 18.7 (3) | 100 (16) |
| | F | 16.7 (1) | 33.3 (2) | 0 (0) | 50.0 (3) | 100 (6) |
| TOTAL | | (48) | (44) | (108) | (54) | (254) |

χ^2

df=3

*50.7632 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df=3

*28.6529 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
> $\chi^2_{0.005} = 12.8381$

df=3

*8.0344 > $\chi^2_{0.050} = 7.81473$
(< $\chi^2_{0.010} = 11.3449$)

れない”場合よりも、ある意味では更に拒絶の度合いが強くなったときがこの問19だとみてよいであろうが、その結果をみれば、日本人、アメリカ人、イタリア人の間に有意差が明確に存在している。ここで特徴的なのはアメリカ人、日本人とも男女間でNpの差の著しいことで、いずれのグループでも男子のNpは非常に小さく(但し黒人男子のみNpが大きい。同じアメリカ人でも白人黒人間に有意差がある)。女子は男子に比べてNpがはるかに大きくなっている。

しかしイタリア人となると男子のNpも著しく大きいのであって、男子のなかでは全グループ中最大となり、すでに上で説明した問14と問20に共通した“神経のせん細

さ”を物語る特徴がはっきりとうかがわれる。なおイタリアの女子においては特に他と比べて目立った特色がうかがわれない。またイタリア人のなかでの男女差は他グループのようにはっきりあらわれてはいない。

なおPについてみるならば、アメリカ人特に白人において最も大きく、イタリア人がそれに次ぎ、日本人では甚だ小さくなっている。日本人ではその代り、Naの非常に大きいのがこれまた特色と言えるだろう。

ただ以上の3つの問の結果について、谷氏はいささか予想外だと述べている。イタリア人の場合、“他人は他人、自分の知ったことではない”という傾向が強いからだ

表13 問25 (英訳版伊訳版では問19) “それがうまくゆかなかったわけは”に対する反応分布

Tab. 13 Distribution of Responses to Q19 “I could not do it because”

日本人 (Japanese)

| | | Id | Io | Nu | Ei | Total |
|-----------------|---|--------------|------------|--------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 75.9 (22) | 0 (0) | 13.8 (4) | 10.3 (3) | 100 (29) |
| | F | 75.0 (30) | 2.5 (1) | 15.0 (6) | 7.5 (3) | 100 (40) |
| 村落 (Village) | M | 68.9 (31) | 2.2 (1) | 24.4 (11) | 4.4 (2) | 100 (45) |
| | F | 63.3 (19) | 3.3 (1) | 23.3 (7) | 10.0 (3) | 100 (30) |
| TOTAL | | (102) | (3) | (28) | (11) | (144) |

上段数字：パーセント (%)
() 内数字：実数

アメリカ人 (Americans)

| | | | | | | |
|---------------|---|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 白人 (White) | M | 13.8 (4) | 27.6 (8) | 55.2 (16) | 3.4 (1) | 100 (29) |
| | F | 8.1 (3) | 59.5 (22) | 24.3 (9) | 8.1 (3) | 100 (37) |
| 黒人 (Black) | M | 6.1 (2) | 48.5 (16) | 42.4 (14) | 3.0 (1) | 100 (33) |
| | F | 2.6 (1) | 36.8 (14) | 50.0 (19) | 10.5 (4) | 100 (38) |
| TOTAL | | (10) | (60) | (58) | (9) | (137) |

χ^2

 $df=3$
 $*137.7195 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$
 $> \chi^2_{0.005} = 12.8381$

イタリア人 (Italians)

| | | | | | | |
|-----------------|---|------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 都市 (City) | M | 1.7 (1) | 78.3 (47) | 15.0 (9) | 5.0 (3) | 100 (60) |
| | F | 4.3 (3) | 58.6 (41) | 30.0 (21) | 7.1 (5) | 100 (70) |
| 町 (Town) | M | 2.0 (1) | 68.0 (34) | 28.0 (14) | 2.0 (1) | 100 (50) |
| | F | 1.9 (1) | 71.7 (38) | 18.9 (10) | 7.5 (4) | 100 (53) |
| 村落 (Village) | M | 6.3 (1) | 50.0 (8) | 18.8 (3) | 25.0 (4) | 100 (16) |
| | F | 0 (0) | 83.3 (5) | 16.7 (1) | 0 (0) | 100 (6) |
| TOTAL | | (7) | (173) | (58) | (17) | (255) |

$df=3$
 $*246.9887 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$
 $> \chi^2_{0.005} = 12.8381$

$df=3$
 $*24.4926 > \chi^2_{0.050} = 7.81473$
 $> \chi^2_{0.005} = 12.8381$

(Es=0 in all groups)

ということであるが、イタリア人の持ついわゆる“individualistic”な特色と孤独感との関係について、更に検討してみる必要があるように思われる。

7. 失敗の原因についての態度

さきの述べたように、問25—36（英訳版および伊訳版では問19—30）については問題の原因および願望の様式に従って分析を行なったのであるが、これらの問のなかで最も興味ある結果を示しているものとして、問25（英訳版では問19）“それがうまくゆかなかったわけは”について検討してみれば表13の通りである。

まず日本人の場合には“それは私が変わらなかったのです”，“私の能力の足りないため”などの如き Id 型の反応が圧倒的多数を示すのに対して、イタリア人において圧倒的なのは“忙しかったから”，“あまり良く知らないから”，“あまりやりたくなかったから”，という如き Io 型の反応、および“困難だったから”などの Nu 型の反応であり、Id 型反応はきわめて少なくなっている。こうした特色は特にイタリア人において顕著なのであり、アメリカ人がある距離をおいてそれに次いでいる。

こうしてみれば、まず日本人においては、ことの失敗にあたって自らを責める“内罰的”傾向が顕著であるのに対して、自分のせい（責任）ではないのだとする“無罰的”あるいは“外罰的”傾向がイタリア人において最も強く、アメリカ人がそれに次ぐといつてよいであろう。

なお谷氏はイタリア人においてはどの集団においてもその成員同士の結びつきは強いのに、最終責任をだれもとろうとしないので、なにかにつけて責任のなすりあいがおこることを指摘している。この点が日本とは非常に異なる点で、こうしたところから日本ではひとつひとつの集団の機動力、機能効率が極めて高いのに、イタリアではどうしても低くなりがちなのである。

8. “心からのねがい”

問30（英訳版、伊訳版では問24）“私の心からの願いは”の結果について次に分析してみよう。これについても先に述べたごとく、Id, Io, Ei, Es の4型を分類することができるのであるが、型式分類よりはむしろその内容を主要項目について具体的に分類してみた結果が表14である。

これによってみれば、イタリア人中学生の最大の関心は“学校の試験により成績を出すこと”，“うまく進級できること”，“無事に卒業できること”，“先生に叱られないこと”等々、学校や学業に関することであるが、これはひとつにはこのテストが試験の直

表14 問30(英訳版伊訳版では問24)“私の心からの願いは”に対する反応分布

Tab. 14 Distribution of Responses to Q24 “My greatest desire is”

| | | 自己の改善 Improvement of myself | 物質的なものぞみ Material objects | 成功, 平穏な生活 Successful and peaceful life | 学業関係 School and school works | 将来の職業 Future career | 金持になる To become rich | 家族の長生と健康 Health and long life of family members | 友人と仲良く To get along with friends | 異性の友人, 結婚 Marriage, heterosexual love | 世界平和 World peace | 社会の改善 Improvement of society | 旅行 Travel | その他 Others | 計 Total | |
|-------------------|---|--------------------------------|------------------------------|---|---------------------------------|------------------------|-------------------------|--|-------------------------------------|--|---------------------|---------------------------------|--------------|---------------|-----------------------------|--|
| 日本人 (Japanese) | | | | | | | | | | | | | | | 左数字：パーセント (%) () 内数字：実数 | |
| 都市 (City) | M | 12.5 (4) | 9.4 (3) | (0) | (0) | 3.1 (1) | 3.1 (1) | 15.6 (5) | 9.4 (3) | 12.5 (4) | 15.6 (5) | 3.1 (1) | (0) | 15.6 (5) | (32) | |
| | F | 37.5 (15) | (0) | 2.5 (1) | 2.5 (1) | 5.0 (2) | 5.0 (2) | 17.5 (7) | 10.0 (4) | (0) | 5.0 (2) | (0) | 5.0 (2) | 10.0 (4) | (40) | |
| 村落 (Village) | M | 4.9 (2) | 14.6 (6) | 2.4 (1) | 14.6 (6) | (0) | 2.4 (1) | 14.6 (6) | 2.4 (1) | (0) | 7.3 (3) | 14.6 (6) | (0) | 22.0 (9) | (41) | |
| | F | 7.1 (2) | (0) | 3.6 (1) | 10.7 (3) | (0) | (0) | 39.3 (11) | 17.9 (5) | (0) | 10.7 (3) | 7.1 (2) | (0) | 3.6 (1) | (28) | |
| アメリカ人 (Americans) | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 白人 (White) | M | 12.9 (4) | (0) | 9.7 (3) | (0) | 22.6 (7) | 32.3 (10) | (0) | 3.2 (1) | 12.9 (4) | (0) | (0) | (0) | 6.5 (2) | (31) | |
| | F | 4.2 (2) | 4.2 (2) | 12.5 (6) | 2.1 (1) | 29.2 (14) | 2.1 (1) | 2.1 (1) | 2.1 (1) | 31.3 (15) | (0) | (0) | (0) | 10.4 (5) | (48) | |
| 黒人 (Black) | M | (0) | 2.9 (1) | 5.7 (2) | 11.4 (4) | 57.1 (20) | 5.7 (2) | 5.7 (2) | (0) | 2.9 (1) | (0) | (0) | (0) | 8.6 (3) | (35) | |
| | F | 8.1 (3) | 2.7 (1) | 10.8 (4) | 16.2 (6) | 35.1 (13) | 2.7 (1) | 5.4 (2) | (0) | 13.5 (5) | (0) | (0) | 2.7 (1) | 2.7 (1) | (37) | |
| イタリア人 (Italians) | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 都市 (City) | M | 4.4 (3) | 16.2 (11) | 10.3 (7) | 22.1 (15) | 16.2 (11) | 1.5 (1) | (0) | (0) | 8.8 (6) | (0) | 1.5 (1) | 1.5 (1) | 17.6 (12) | (68) | |
| | F | 1.4 (1) | 1.4 (1) | 15.7 (11) | 24.3 (17) | 14.3 (10) | 1.4 (1) | (0) | (0) | 17.1 (12) | (0) | 5.7 (4) | 14.3 (10) | 4.3 (3) | (70) | |
| 町 (Town) | M | 4.2 (2) | 10.4 (5) | 2.1 (1) | 20.8 (10) | 18.8 (9) | (0) | (0) | (0) | 25.0 (12) | (0) | (0) | 4.2 (2) | 14.6 (7) | (48) | |
| | F | 11.1 (6) | (0) | 5.6 (3) | 24.1 (13) | 9.3 (5) | (0) | (0) | (0) | 7.4 (4) | (0) | (0) | 18.5 (10) | 24.1 (13) | (54) | |
| 村落 (Village) | M | 6.3 (1) | 18.7 (3) | 6.3 (1) | 6.3 (1) | 12.5 (2) | (0) | (0) | (0) | 12.5 (2) | (0) | (0) | 12.5 (2) | 25.0 (4) | (16) | |
| | F | (0) | (0) | (0) | 16.7 (1) | (0) | (0) | (0) | 16.7 (1) | 16.7 (1) | (0) | (0) | 33.3 (2) | 16.7 (1) | (6) | |

後に行なわれたことにもよるかと思われる。しかしもうひとつ見逃せない事実はイタリアにおける最近の強い教育熱の存在であり、特に母親たちの間で非常に顕著であると言われている。なおこうした学校に関する答はイタリアに次いで米国黒人の間でも多くなっているが、これのほうは“学校を早く退学したいこと”など、イタリアの場合とは逆方向の **negative** な答の含まれているのが特徴である。

イタリアにおいてもうひとつ非常に顕著なのは“早く結婚したい”“ボーイ（ガール）フレンドを持ちたい”などと異性の友人や結婚に関する願望が極めて多いことである。実はこうした種類の答は米国人の女性において最も多く“ジャックに早くまた会うこと”“トムの子供を生むこと”などと極めて具体的直接的な形で表現されており、この傾向はやや弱い形で黒人女子の間にもみられるのだが、イタリアの場合はむしろ女子よりも男子においてより顕著な点の特徴であろう。前の“異性に対する態度”のところでも、イタリアでは女子に比べて男子が著しく積極的なことを述べたが、“願望”の面でも同じ点が明らかに示されると言ってよいであろう。なお日本人の間ではこの種の答は殆んどゼロに近く、その代りとして、女子の間で“〇〇さんと仲良くしたいこと”などの如く、同性の友人との交友関係にもっぱら関心がむいている。

それでは日本において一番強い関心はといえば極めてこれが特徴的で、“家族の長生き”、“家族の幸福”などを答える者が極めて多くなっている。なおここでは“家族”ということばのもとに総括したが、なかには、はっきり“両親の長生き、幸福”などと明示してある場合が非常に多く、またそのように記していない場合でも両親をさしていると思われる場合が少なくない。要するに父母を軸とした家族主義的傾向が日本人の間に極めて顕著であることがうかがえる。こうした答はアメリカ人の間には殆んどなく、またイタリア人の間では全くゼロである。イタリア人の場合、母や父に対する **P**、特にセンチメンタルな依存関係の強いことはさきに述べたところであるが、それでいてこの問において父母に関連する答をひとつも出していないことは、日本人との相違点をよく物語っていると言えよう。

他方、アメリカ人の間において極めて多いのは、自分の“将来の具体像”について希望を述べる答である。アメリカ人の間においては、白人黒人とも、そして特に黒人が将来の職業についてきわめて具体的な希望を述べている。すなわち白人男子7名が建築家、デザイン・エンジニア、フットボール選手、弁護士、等々になりたい…、NASAにつとめたい等々…と述べ、白人女子も14名が音楽教師、体操教師、獣医師、歌手、スチュワーデス等々になりたいことを希望として答えている。この点で更に注目されるのが黒人の場合であって、男子の9名が運動選手（バスケットボール、野球、

フットボール、ローラースケート)、音楽家、などになりたいと答え、同じく女子の7名が教員、モデル、歌手、デザイナー、コンピューターのパンチャー等になりたいと述べている。アメリカのなかで低い位置におかれている黒人下層の者にとって、大きな名声を得るためには運動選手などの職業につくことのみが可能な方法であると中学生の眼にもうつっているから、このような答が多く出てきているものであろう。

次にイタリアの場合、アメリカほどではないにせよ男子では官吏、技師、計理士、測量士、電気技師、科学者、コック、スポーツ選手など。女子では教員、医者、通訳、ジャーナリスト、女優などをあげている。これらと比べてみれば、日本の中学生の間で将来の具体的なプランについてあげている者は皆無に近い。そしてせいぜい“偉くなって親を安心させたい”などの如く極めて漠然とした答を出している。この原因のひとつには日本の場合、中学からまず高校へ、そして大学へと入試をパスしていかない限りはどんな具体的なプランをもたてることができないという事実であろう。

なおアメリカの白人男子の間においては“金持ちになること”としている答が著しく多かった。これは他のグループにおいては全くみとめられない事実であり、アメリカの中産上層の傾向として注目すべきことなのかもしれない。この種の答はイタリアでは皆無に近いが、その代りイタリアの答のなかには“自転車(オートバイ)を買ってもらいたいこと”“自分の家(部屋)を持ちたいこと”などがあり、いちおう“物質的なぞみ”という傾向のなかに分類してある。

それからまた日本人の間におけるもうひとつの特色は、都市において“自分を向上させたい”“自分の悪い性格を治したい”“もっと素直になりたい”など“自己の改善”を望む答の多いことであった。この種の答はアメリカ人、そしてイタリア人の間においても低率ながら存在している。

それからまた日本の場合においては“世界平和”とか自分の住む地域や国などのさまざまな改善をいろいろな形で希望する答が多かった。この点は他のグループにおいては殆んど全くと言ってよいほどみられない。

なおイタリア人の間でもうひとつ著しいのは特に女子の間でさまざまな場所(ヨーロッパの各地——例えばロンドン——、アメリカ、日本など)への旅行をしたいという答の多いことであった。なお日本でこのテストを行なったのは1965年であり、もしもっと最近にテストをやったのであれば日本でも旅行に関する答がずっとふえていたのかもしれないのだが、いずれにせよイタリアの場合、男子ではこの答が殆んどゼロに近いのに対して女子のみこの答が多く出ているのは注目し得る。谷氏によれば、イタリアにおいてはアメリカなどに比べて主婦は家庭や育児にしばられて外へ出かけ

られない、旅行にも行けないということが非常に多いという。あるいはこうした事情に関連しているのかもしれないというのが筆者の解釈である。

9. “なにより必要なのは”

問36 (英訳版, 伊訳版では問30) “なにより必要なのは” の反応を表15 によってみればイタリア人の中で最も多いのは“愛” とか “女”, “妻” とか “異性関係” をあげている答であり, しかも男女ともに相当高率であるのが特色と思われる。なお“愛情” という分類項目を別にもうけたが, ここでいう愛情は異性間のものではない場合であり, 明らかに異性間のものをさす“愛” (イタリア語の *amore* であらわされているもの) はすべて “異性関係” のなかに入れて分類した。

これに対して日本人のなかで最も多いのは “まじめさ” とか “まごころ, 誠実さ” などさまざまな “性格上の特性” をあげている解答である。但しイタリア人においても同種の答はある程度まであらわれている。

なおもうひとつ日本人の間における特色は “家族” という答が特に村落で非常に多い点で (なおここでは単に “家族” と記してあるもの以外に “両親” とか “母” とかいうものもすべて一括して家族のなかへ入れた), ここでもさきに述べたような “家族主義的” な結合の強さがみとめられる。そして同様の答はイタリアにおいても日本に次いで多く, アメリカの白人ではずっと減っている。ところが同じアメリカ人でも黒人になればまた増えており, こうしてみるとイタリアとそして黒人の間で家族が相当程度, 重視されていることがわかるのである。

他方, アメリカの間における最も大きな特色として “金” (*money*) という答が白人の間で著しく多い。彼等の間において最も多い答である。前述の “心からのねがい” で “金持ちになること” を最大ののぞみとしている答の極めて多いのとピッタリ相応しているとみてよいだろうが, 白人ほどではないにせよ, 米国黒人, ついで日本人の間でも男子においてのみ, この答が多少とも出ているのは興味深い。しかしイタリア人の中では極めて少ない。その代りとも言えようが, ここでも彼等の間では, “オートバイ, 自転車, 家” 等々, 物質的なものをあげている場合が案外に多いのであって, “心からのねがい” に対する答の場合にそのまま対応している。

IV. む す び

以上のところをまとめてみれば, イタリア人のパーソナリティの顕著な特性として, 次の諸点をあげることができる。

表15 問36 (英訳版伊訳版では問30) “なににより必要なのは” に対する反応分布
 Tab. 15 Distribution of Responses to Q30 “What I need most”

| | | 性格上の 特性 Some traits in personal character | 愛 情 Affection | 物質的な もの Material objects | 学校関係 School and school works | いのち Life | 金(かね) Money | 食 物 Food | 家 族 Family | 友 人 Friendship | 異性関係 の愛 Hetero- sexual love | そ の 他 Others | 計 Total |
|-------------------|---|--|------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|-------------|----------------|-------------|---------------|-------------------|---|-----------------|------------|
| 日 本 人 (Japanese) | | | | | | | | | | | 左数字：パーセント (%) () 内数字：実数 | | |
| 都 市 (City) | M | 25.8 (8) | (0) | 3.2 (1) | (0) | (0) | 16.1 (5) | 3.2 (1) | 6.5 (2) | 12.9 (4) | 6.5 (2) | 25.8 (8) | (31) |
| | F | 25.0 (9) | 22.2 (8) | 2.8 (1) | 5.6 (2) | 2.8 (1) | 8.3 (3) | (0) | 8.3 (3) | 11.1 (4) | (0) | 13.9 (5) | (36) |
| 村 落 (Village) | M | 22.2(10) | 2.2 (1) | 2.2 (1) | 4.4 (2) | 2.2 (1) | 20.0 (9) | 6.7 (3) | 15.6 (7) | 15.6 (7) | (0) | 8.9 (4) | (45) |
| | F | 14.3 (4) | 17.9 (5) | (0) | (0) | (0) | 7.1 (2) | (0) | 35.7(10) | 7.1 (2) | (0) | 17.9 (5) | (28) |
| アメリカ人 (Americans) | | | | | | | | | | | | | |
| 白 人 (White) | M | 3.3 (1) | 3.3 (1) | 6.7 (2) | (0) | (0) | 43.3(13) | 10.0 (3) | 3.3 (1) | 3.3 (1) | 10.0 (3) | 16.7 (5) | (30) |
| | F | 6.7 (3) | 22.2(10) | 6.7 (3) | 4.4 (2) | (0) | 11.1 (5) | (0) | 6.7 (3) | 6.7 (3) | 11.1 (5) | 24.4(11) | (45) |
| 黒 人 (Black) | M | 10.0 (3) | (0) | 6.7 (2) | 26.7 (8) | (0) | 20.0 (6) | (0) | 13.3 (4) | (0) | 6.7 (2) | 16.7 (5) | (30) |
| | F | 11.4 (4) | 2.9 (1) | 22.9 (8) | 17.1 (6) | (0) | 11.4 (4) | (0) | 8.6 (3) | 5.7 (2) | (0) | 20.0 (7) | (35) |
| イタリア人 (Italians) | | | | | | | | | | | | | |
| 都 市 (City) | M | 12.3 (7) | 12.3 (7) | 12.3 (7) | 8.8 (5) | 1.8 (1) | 5.3 (3) | 5.3 (3) | 5.3 (3) | 1.8 (1) | 22.8(13) | 12.3 (7) | (57) |
| | F | 4.8 (3) | 16.1(10) | 3.2 (2) | 9.7 (6) | (0) | (0) | 9.7 (6) | 4.8 (3) | 6.5 (4) | 30.6(19) | 14.5 (9) | (62) |
| 町 (Town) | M | 16.7 (8) | 4.2 (2) | 6.3 (3) | 12.5 (6) | 6.3 (3) | 8.3 (4) | 4.2 (2) | 10.4 (5) | 6.3 (3) | 4.2 (2) | 20.8(10) | (48) |
| | F | 20.5 (9) | 6.8 (3) | 4.5 (2) | 15.9 (7) | (0) | 9.1 (4) | (0) | 11.4 (5) | 4.5 (2) | 2.3 (1) | 25.0(11) | (44) |
| 村 落 (Village) | M | 17.6 (3) | 11.8 (2) | 11.8 (2) | 5.9 (1) | (0) | (0) | 11.8 (2) | 17.6 (3) | (0) | 17.6 (3) | 5.9 (1) | (17) |
| | F | 20.0 (1) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | 20.0 (1) | 20.0 (1) | 20.0 (1) | 20.0 (1) | (0) | (5) |

1. 両親に対する極めて強い P, 特に母親に対するセンチメンタルな依存的傾向。
2. 異性に対する男子の極めて積極的な傾向, 特にパターン化された“賞讃, おせじ”の行動。そして他方, 女子の側におけるこれまたなかばパターン化されている如くみえる異性回避の傾向。
3. 権威に対する極めて強い P。
4. 他人からからかわれたときの極めて強い反撥心とその背後に推定される名誉, 恥の感情。
5. 他人からの拒絶に対する強い孤独感。
6. ものごとに矢敗した際の責任回避的な無罰的他罰の傾向。
7. “心からのねがい”や“なにより必要なものは”などの答にあらわれる異性への強い関心。また家族の重要性に対する意識もある程度みとめられる。

以上の通りであるが, 先にも触れたとおり, 彼等の権威に対する意識の構造, 特に権威者, 庇護者に対する日本的な義理人情の感情との類似点・相違点, また同じく彼等における名誉の意識と日本人の恥の感覚との類似点・相違点, 彼等における individualistic な傾向の特性——こういった点についてはなおいっそうの分析が必要なように思われる。

文 献

バルジーニ, L.

- 1965 『イタリア人』室伏哲郎・室伏尚子訳 弘文堂。(原著 BARZINI, L., *The Italians*. Atheneum Publishers, 1964)

D'ANGELO, L.

- 1968 *How to be an Italian*. Price/Stern/Aloan Publishers.

LEBRA, T. S.

- 1973 Compensative Justice and Moral Investment among Japanese, Chinese, and Koreans. *Journal of Nervous and Mental Disease* 157 (4): 278-291.

PHILIPS, H. P.

- 1965 *Thai Peasant Personality*. University of California Press.

RYCHLAK, J. F., P. H. MUSSEN and J. W. BENNETT

- 1957 An Example of the Use of the Incomplete Sentence Test in Applied Anthropological Research. *Human Organization* 16(1): 25-29.

祖父江孝男

- 1969 「文章完成法テストよりみた日本人のパーソナリティ：米国人との比較および地方差の検討を中心として」『臨床心理学研究』8(2): 65-77 (祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂, 1976に再録, pp. 252-275)

- 1972 A Cross-cultural Study by the Use of the Sentence Completion Test: The Japanese, the American and the Eskimo Personality. Paper read at the 20th International Congress of Psychology (Tokyo).

谷 泰

- 1970 「イタリアの山の村から」『季刊人類学』1(4): 210-243.

- 1971 『イタリア中部山村の調査報告』(京都大学人文科学研究所調査報告書 28).

- 1976 『牧夫フランチェスコの一日：イタリア中部山村生活誌』日本放送出版協会。

東京ロールシャッハ研究会

- 1964 『構成的文章完成法 (K-SCT)』(タイプ印刷)。